広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	芥川龍之介の作品の登場人物にみる人間性の分析
Author(s)	テーウエット サウエットアイヤラム,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 15期 : 17 - 22
Issue Date	2001-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038900
Right	
Relation	

芥川龍之介の作品の登場人物にみる人間性の分析

テーウエット・サウエットアイヤラム

0. はじめに

芥川龍之介は日本で有名な作家の一人である。とりわけ、黒澤明監督の「羅生門」〈注：芥川の『羅生門』とは異なる。〉という映画で、『藪の中』が取り上げられてから、彼の名前は、日本だけでなく、外国でも知られるようになった。私も、日本の作家の中では、芥川龍之介が大好きである。彼の作品の内容は、人の薄情さを描いたものが多く、広く一般に理解されやすいようである。おそらく、この人間的な本質がどこの国でも共通に見られるからであろう。

芥川の作品の中で、私が特に好きなものが二つある。一つは『羅生門』で、もう一つは『杜子春』である。『羅生門』は大正４年〈１９１５年〉11月の『帝国文学』に柳川隆之介というペンネームで掲載された。なお、『杜子春』は大正９年（１９２０年）６月に執筆されている。二つの作品は、多くの読者を得ているようである。そこで、本レポートでは、この二つの作品に絞って、まず、第１に主人公について描写し、第２に世界に生きる人間についての芥川の哲学について考察し、そして第３に両作品の中でシンボル化された芥川の世界観について言及したい。

１．主人公についての描写

いずれの物語でも、主人公は必ず最後に何らかの新しい考えを抱くようになる。つまり，迷いから覚めて、自分の道を見出していくという方向性を持っている。

杜子春　杜子春は、人間の薄情さや利己心などに嫌悪を感じていた。そして、仙人に成ることに夢中になった。仙人の鉄冠子に、峨眉山の奥に連れて行かれ、「どんなことが起こっても、けっして声を出すな。」と言われる。そして、ずっと我慢出来れば、弟子にしてもらえるというのである。御殿の上の閻魔大王の前にでも、どんなに鬼たちにつらい方法で虐待されても、両親が鉄の鞭で残酷に打たれても、杜子春はどうしても口を利かないつもりでいた。その間に、杜子春は、お母さんの声を聞いた。お母さんは、杜子春に対する純粋な温かい愛情を表した。お母さんのおかげで、杜子春は、自分の行動が本当に薄情で、許せないくらいの罪だと気が付いた。そして、自分が貧乏な時、他人に侮られたことも振り返って考えさせられた。二つの出来事を比べると、全く違いがない、同じ薄情さだと反省するようになって、「お母さん」と叫んでしまうのである。こうして、杜子春は自分の道を見出した。そして、物語の最後で、「人間らしい、正直な暮らしをする」という

決心が出来るようになる。

<u>羅生門</u>　この物語の中で、下人が略奪するかどうかを決心するのは、もっとも最後のことである。下人は、主人から暇を出されたばかりで、これからどうしようかと迷っていた。そして、犬のように飢死しないためには、泥棒でも何でもしなくてはなるまいという考えが浮かんでいた。しかし、本当にそうするかどうか迷っていた。その行動を、積極的に肯定する勇気がなかったのである。その内、ある老婆が死骸の髪の毛を抜いているのを見た。最初、下人は、恐怖を感じた。しかし、老婆の行動を見ているうちに、しだいに恐怖感が薄れていった。その代わりに、老婆に対して激しい憎悪の気持ちが浮かんできた。そこでは、泥棒でもしようかという気持ちが消え、悪を憎む気持ちさえ抱くようになる。ところが、その老婆は、自分がこうしなければ飢死してしまうので、仕方がないと言い訳する。それに加えて、老婆が髪の毛を抜いていたその女の生きていた頃の悪事も披露しはじめた。老婆は、このようなことをしても悪いとは思わないと言うのである。こうして、老婆の言い分に納得した下人は、ついに決心して、老婆の着物を盗んでしまうのである。

2.　クライマックスを創る女性

いずれの物語においても、女性がクライマックスを創っている。以下に、『杜子春』では、母親であり、『羅生門』では老婆である。決断の善悪の方向は、まったく逆であるが、決心させるきっかけを作るのは、いずれも女性である。しかもある程度人生を経験した女性である。

<u>杜子春</u>　『杜子春』にクライマックスを創る女性はお母さんである。お母さんが子供に対する純粋な愛を表したおかげで、杜子春は両親に対する自分の行動が本当に薄情だと気がついた。そして、薄情さというと、もう一つの出来事が杜子春の考えに浮かんできた。その出来事は、杜子春が大金持ちになった時、皆、世辞も追従もしたけれど、いったん貧乏になった時、優しい顔さえもしていなく、本当に薄情だったということである。彼の両親に対する薄情さと人々の彼に対する薄情さはいずれかというと同じ薄情だということを彼は教えてもらって、反省した。もし、その時、お母さんが何も言わなかったら、この作品の結果はおそらく変わって、悲劇であろう。即ち、悲しい結果で終わるだろう。というのは、仙人の鉄冠子は「もし、お前が黙っていたら、おれはお前の命を絶ってしまおうと思っていたのだ。」と言ったからである。それで、お母さんの役割が非常に必要で、大切である。また、お母さんの役割は何のお礼や褒め言葉なども求めず、子供のためなら、どんな苦しいことが自分に起こっても、我慢できて、何でもやるという人のパターンとして表されている。

<u>羅生門</u>　『羅生門』にクライマックスを創る女性は老婆である。老婆がそのような言い訳を聞いた後、下人も、老婆の言葉（自分がこうしなければ、飢死して、仕方がない）を使って、泥棒すると決心した。もし、その時、老婆がそのような言い訳をしなかったら、

最後の結果はおそらくこのようなことにならないだろう。従って、老婆の言葉のおかげで、クライマックスのところにまで達させた。しかも、老婆の役割もこの世にいる人間の薄情さを表している。自分がやったことは正しく、誰でもこのような状況にいれば、こうしないといけないという理由を探そうとした人のパターンとして表されている。私はこのような人の別の例もを挙げることが出来る。例えば、電車に乗っている時、ほとんどの若者が老人に席を譲らない。おそらく自分も疲れたとか、他の人は譲ってあげないのに、なんで自分はしなけれならないのかとかこんな風に答えるだろう。これは理由でなく、言い訳である。

3. 芥川の人間哲学

芥川の人間に対する考え方は、誰でも自分の利益を考えてばかりいて、自分だけ良ければいいというわがままな存在であるとするところから出発している。

杜子春　鉄冠子が三回目に杜子春の前へきた時、杜子春に「車にいっぱいの黄金はもう要らない」と言われた。というのは、彼は人間というものに愛想がつきたからである。大金持ちになった時、皆、世辞も追従もしたけれど、いったん貧乏になった時、優しい顔さえもせず、本当に薄情だったということである。けれども、鉄冠子に、貧乏をしても、安らかに暮らして行くのかと聞かれたら、杜子春もはっきり確信出来なかった。実際、杜子春は、他人の薄情さから十分に習ったのではないか。何で満足していなかったのか。何でそのとき、まだ仙人になりたいのか。これは、自分だけのための利益を考えていたのではないかと思われる。しかも、地獄にいた時、肉も骨も鞭で打ち砕かれた両親が見えても、杜子春もじっと黙っていて、かたく眼をつぶっていた。何かを言い出したら、仙人になれないと恐れがあるということだからである。その時の杜子春も自分だけ良ければいいと考えていたのではないか。自分が仙人に成るため、自分のことだけ考えて、両親の愛などまで忘れてしまった。このポイントを見たら、杜子春も自分の利益だけ考えていると言えよう。

羅生門　下人も老婆もこのような悪いことをしないと、飢死をすると言い訳をした。二人ともわがままに言った。下人のように悪い目に合った人がいたら、その人は泥棒にならなければならないのかと疑問に思う。泥棒しないと、築土の下か道端の土の上で、飢死して、犬のように棄てられるのかと首をひねる。しかも、二人とも、どの程度努力して、いい仕事を探すのか。本当に頑張るのかと聞きたくなる。この泥棒の道を選んだのは自分の利己心のせいではないか。また、飢死をするかどうか、自分自身に次第のモノではないか。泥棒にしても、飢死をする場合もあろう。

４．人間というものは他人の悪い点だけを観察していたが、自分の欠点を気づかなかった。

いずれの物語においても、自分が悪いことをしても、気づかなかった。ところが、他人

の欠点はすぐに気がついて、耐えられないくらいだ。

杜子春　大金次第に人は手の平を返すように態度を変えるということから、杜子春は人の薄情さなどの悪い点をよく観察して、不満に思った。けれども、杜子春自信でも悪い点があるのに、やはり、彼も自分の欠点を気がつかなかった。彼の欠点は仙人の鉄冠子と会う前のことと会った後のことから見られる。鉄冠子と会う前に、杜子春は金持ちの息子だったが、財産を使い尽くしていたので、寝る所もないくらい困っていた。しかも、鉄冠子と会った後、杜子春は洛陽の都でも、ただ一人という大金持ちになったぐらいたくさんのお金を二回ももらった。ところが、いくら多くても、一年二年しか経たないうちに、彼は前と同じように、つかい尽くしていた。杜子春は二回大金持ち、そして、貧乏になった。一回目も二回目も彼が大金持ちになった時、人々は世辞したりしたが、貧乏になった時、挨拶一つもしなかった。二回も同じ出来事を繰り返したのに、何で、杜子春は二回目にもまだ同じ失敗をしていたのか。なんで２回目の最初から自分の欠点を戒めなかったのか。一回目の失敗からまだ十分に習っていなかったのか。毎日毎日、贅沢ばかりして、良くない人と交際していた。更に、もらった財産も短い間に、つかい尽くした。自分が仕事を稼いだお金ではなかったのに、何で使う前に、よく考えていなかったのか。他人を悪く言う前に、自分がやってきたことをしっかり考た方がいい。

羅生門　下人は老婆が死骸の髪の毛を抜いているのを見た時、非常に憤って、許せないぐらい悪事だと思った。ところが、前には、下人も泥棒する道を迷っていた。自分も悪い考えを持っていたのに、何でその時、自分のことを怒らないのか。逆に、自分がそうしないと、飢死をして、犬のように棄てられると言い訳した。自分のしたことは何でも必要で、正しい。やはり、人間というものは、他の人の悪い点ばかり見て暮らしている。

５．この世の幸せは永久のものではない。手に入りやすいが、長持ちすることが出来ない。仏教の考え方を表している。

いずれの物語においても、仏教の考えが隠れている。長持ちするものは全くないということを表している。

杜子春　杜子春が両親と鉄冠子にもらったお金を幸せに使った時点は短い。最後に、何もない状態に戻った。何もない状態は人間の本質である。生まれた時にも、何も持ってこなくて、亡くなった時にも、何も持っていくことが出来なかった。何ものでも、自分のものではなく、永久のものではないということである。木と同じように、春や夏になると、大変きれいになる。実も葉っぱもいっぱい咲いている。私たちを非常に楽しませる。ところが、冬になると、一つの葉でさえも、守ることが出来ない。幸せも手に入りやすいけど、守れる人がいない。

羅生門　「盛んになった京都は地震とか火事とか飢饉とかいう災いが続いて起こって、洛中のさびれかたは一通りではない。」ということから見ると、これも仏教のことを表す

のである。この世に永久のものはなく、どんなに立派で、盛んになったモノでも、最後に、何もない状態に戻らないといけないということである。また、作品にはっきり書いてなくても、おそらく主人といた時が、下人にとって一番幸せだろう。どうしてかというと、住むところもあるし、食べるものも毎日あるからである。けれども、幸せな時間も非常に短い。

６．作名の中に、シンボルが隠れている。

いずれの物語においても、読者は作名を見るだけで、終わりの内容は想像できる。

杜子春　とししゅんの「しゅん」は日本語で「春」という漢字で書く。この「春」という漢字を見ると、やはり季節のことを思い出す。「春」は始まり、ぼろぼろの生活や色々な苦しみが終わって、幸せな楽しい状態に入ろうとする意味を含んでいる。しかも、作品の中に、「春」の景色が三つある。杜子春が鉄冠子と会った景色なのである。おそらく、「春」の本当の意味は杜子春が正しい判断が出来るということであろう。自分が仙人になるため、鉄の鞭で打たれている両親を助けないことには耐えられる代わりに、人間らしい正直な暮らしをする道を潔く選べたという意味も含んでいるだろう。また、名前についた「春」の漢字も、どうしても最後に幸せな結果に済むと読者に想像もさせただろう。

羅生門　「羅」は「魂」と「鬼」、「生」は「生まれる」、「門」は「門」で、三つの言葉を含んで翻訳したら、「鬼が生まれる門」という意味である。「鬼が生まれる門」なので、悪いことがここで起こると言えよう。そして、生まれたばかりの鬼は下人なのである。作名がこんなに悪いイメージを持っているのを知ったら、読者は恐ろしく思うだろう。

７．この二つの作品から得たある事実。

杜子春　人の外部や姿などを見ただけで、すぐに判断することは不公平で、良くないと教えてもらった。例えば、みすぼらしい痩せ馬の形をしている両親でも、子供に対する温かく、純粋な思いやりや愛がたっぷりある。形は人間ではなくても、心は人間以上である。逆に、普通の人々のような形をしている人間は、おそらく悪いことばかり考えていて、ゴキブリ以下のモノもいるだろう。

それで、人と付き合うことは心の底を見ないといけない。

羅生門　もし、誰でも「自分がこのようにやったのは理由がある。」と言ったら、「間違い」とか「悪い行動」などはこの世の中におそらくないだろう。皆、自分の理由があるからである。しかし、その理由は本当に正しいかどうかわからない。自分は何かをするなら、正しい道徳を生かして、それに従った方がいい。他人の言った言い訳や理由などを信じ込むのはいけない。

８．おわりに

芥川龍之介は極めて優れた作家である。彼の作品を読んでみたら、彼は「人間とこの世の色々な出来事がよく理解できる」ということがわかった。それで、彼の作品はほとんど「孤独」というモノを表している。芥川龍之介は人間の孤独の承認を一生の文学的主題とした作家である。孤独を主題として、追求しつづけた作家は少ない。小説形式はだいたい、社会を描いたり、二人の人間の精神的なことを表したり、するモノである。というのは、文学に孤独を描くのは非常に難しいことだからである。能力を十分に持っていなかったら、書けないのである。書いても、その作品は嘘っぽいような気がする。

ところで、私が読んだことがある芥川龍之介の作品はいろいろある。例えば、『羅生門』、『杜子春』、『鼻』、『蜜柑』、『蜘蛛の糸』、『藪の中』、『白』などである。前に書いているように、彼の作品の特徴は、だいたい人間の欠点や孤独を表す。私が芥川龍之介の作品が好きなのはこの点である。彼の作品は読みやすいばかりでなく、この世にいる人間の事実についても教えてくれる。私にとって、作品を読むことは、楽しみだけでなく、読んだ後、もっともっと自分のことを顧みる機会を与えてくれる。最後に、これからも芥川龍之介の作品を、出来るだけ、読もうと思っている。